

— 鉄 鋼 ニ ュ ー ズ —

工業標準化功績者の表彰

工業標準化に関する 33 年度藍綬褒章受賞者の褒章伝達式と工業標準化実施優良工場の表彰式が 10 月 23 日首相官邸で行われた。藍綬褒章の受賞者は青木保（日本時計学会長，元東大教授），荒川大太郎（武蔵工業大学教授，協和電設社長），石田四郎（明治大学教授，元東大教授），大島小市（日立造船顧問），下元連（下元建築事務所長）の 5 氏，また実施優良工場に関する通産大臣賞は富士製鉄室蘭製鉄所など 5 工場，同工業技術院長賞は北日本製紙江別工場など 12 工場である。

毎日学術奨励金の決定

本年度の毎日学術奨励金は日本学術会議の審査により人文科学，自然科学両部門の申請 262 件中より 7 件を選定，それぞれ贈呈することに決定されたが，その中に日本鉄鋼協会々長推薦にかゝる次の一件が鉄鋼関係中より選定された。

1 t 試験高炉による湯溜り吹精法の研究(奨励金 50 万円)
東京大学教授 金森 九郎

共同研究者一東京大学助教授松下幸雄，同生産技術研究所助手館充，同中根千富ほか金森研究室員

本年度の鉄鋼生産見越し

通産省では，当初本年度の鉄鋼生産見越しを，年間粗鋼生産量 1,276 万 t（上期 562 万 t，下期 714 万 t），高炉鉄生産量 720 万 t（上期 343 万 t，下期 377 万 t）の生産計画を樹立した。しかし，このほどまとまつた上期の生産実績をみると，高炉鉄生産 347 万 t，粗鋼生産 602 万 t と，いずれも当初計画を上廻つてはいるが，下期鋼材の需給見越しが年当初より低い線に落付きそうなので，結局同省では当初年間生産計画を，粗鋼生産量 1,200 万 t（上期 599 万 t，下期 601 万 t），高炉鉄生産量 700 万 t（上期 345 万 t，下期 355 万 t）に変更した。すなわち当初下期計画量に対し，粗鋼では 113 万 t 減となり，また高炉鉄においても 22 万 t 減となつた。なお混洗率は上期 57%，下期 58% としている。

新尼崎製鉄の発足

尼崎製鉄と尼崎製鋼の両社は，10 月 1 日正式に合併，新会社「尼崎製鉄」として新発足した。新会社の資本金は 25.08 億円で，わが国で第 7 番目の鉄鋼一貫メーカーとなつた。生産能力年産鉄鉄 36 万 t，鋼塊 24 万 t，鋼材 50 万 t。

尼鋼は 21 年 5 月に尼鉄の製鋼部門が独立して発足したが，29 年 6 月にストライキのため事業をやめて内整理に入つた。その後 30 年 4 月神戸製鋼の系列下に入つて事業を再開，今年春から尻鉄との合併が進められていた。本社は 12 月 1 日から大阪市東区北浜 4 丁目に移る。会長には尻鉄会長の竹内大助氏が，社長には尼鋼社長の町永三郎氏が就任した。

神戸製鋼の押出工場完成

神戸製鋼では，かねて長府工場に，総工費 13.5 億円

で高温押出専用 1800 t プレスを中心とする一連の設備をもつた新工場を建設中であつたが，このほどその主要設備が完成，10 月 1 日から生産を開始した。生産能力は月間約 2,000 t である。新押出工場は建家 7,000 坪，押出プレス本体とその補助設備および冷間加工設備より成り，プレス本体は西独シュレーマン社から購入したセジュールネ法専用の最新鋭設備で，その操作は全部自動式となつている。

同社は 31 年 7 月，仏のコントロール社 (CIEP) とユージン・セジュールネ押出法の技術提携を行い，長府工場既存の 1500 t 横型押出プレスを改造，昨年 9 月からわが国はじめての高温押出法による特殊鋼，炭素鋼の鋼管および異型材などの生産販売を開始したが，今回の新工場の完成を見るに至つたものである。

住友金属工業の新製管設備成る。

住友金属工業では，尼崎鋼管製造所にユージン・セジュールネ式押し製管設備の新設工事を急いでいたが，この程完成，試圧を行うこととなつた。

同設備は仏のコントロール社の特許によるもので，500 t の穿孔プレス，2,500 t の押しプレスなどを備え，ベアリング鋼，ステンレス鋼管など約 1,000 t の能力を持つている。総工費は 16.4 億円という。

大同製鋼技術研究所竣工

大同製鋼では，昨冬以来同社星崎工場内に技術研究所を 2 期計画により建設中であつたが，第 1 期工事が 9 月末竣工，完成式を行つた。

今回完成を見た第 1 期工事は，地下 1 階 84 坪，1 階 260 坪，2 階 250 坪から成る鉄筋建築で建物だけに予算 7 千万円が計上された。内部には昨冬米国より 2,500 万円で購入したカントメーター設備を始め，電子顕微鏡，ライヘルト顕微鏡，マイクロ・アナライザー（微小分析計），高温顕微鏡など優秀技術研究器械が設置される。

日本鋼管のラジオ・アイソトープ利用研究

日本鋼管では，さきに本社内に原子力委員会を設け，ラジオ・アイソトープの鉄鋼業への利用研究を進めているが，わが国で初の試みとして，コバルト 60 を利用して高炉内壁煉瓦の侵食状況の調査を行うこととなつた。

その計画によれば，同社川崎製鉄所扇町工場に建設中の 1,000 t 高炉の内壁 16 カ所に 1 ミリキュリーのコバルト 60 を埋込み，外部から放射能の変化を測定，炉がどのように侵食されるかを調べようとするもので，この方法によるとこれまでではほとんど不可能であつた刻々の侵食状況を手に取るように知ることができ，新たに高炉を建設する場合に大いに役立ち，同社が川崎市水江町に建設している鉄鋼一貫 100 万 t プラントの 1,000 t 高炉設計にはこの調査結果を参考にするといつている。

このほか同社では，転炉，コークス炉，圧延機などにも，ラジオ・アイソトープの利用を計画している。